



——突然、だった。

ざわざわと風が草花を揺らしていた。

寺崎をはじめとする視察団の一行が、建設予定の本拠地を一通り視て回り、できればこの周辺の景観と、民衆の姿を視ておきたい、と歴々が話しあって歩いていたときだった。

微かに、耳につく音があった。

(気配が.....、これは、足音.....?)

最初に気付いたのは、雪絵だった。

実際には、周囲の武俠たちがそうであったように、耳で捉えられる程に、はっきりとした音が届いた訳ではない。だが、遠目に、開けた道沿いの堅気の町人が道の脇によっていく動きが、視界の隅に入ったのだ。それは、この郷では、割と日常的に見られる動きだ。

それがどんな時に見られるのかといえば.....そう、例えば、帯刀した人間が、数をなして道を進んで来た時などだ。

堅気の衆は、こういう場合、刃傷沙汰の危険を察知して彼ら武俠などの荒れくれ者に対して、率先して道を開けゆるる。

雪絵も、それをなんとなく知っていて、今ふいにその動きが視て取れて、違和感を抱いたのだ。そして、素早く鋭く近辺に注視を巡らせる。

一団は、建設予定地から麻布を少し南に下り、赤羽橋を渡ってやや進んでいる。歩きながら先程から、この辺りは町家とともに木々が立ち並び、やや雑然として視界が悪いことに、雪絵と持国、そして室泉が気付いていた。だからここは少し安心できない、注意警戒が要るとは感じていた。

最初に町民が動いたのは、寺崎と獅土堂の武俠たちの一団の、ある程度の数の俠たちを視た堅気が動いたのかも、と考えられもした。しかし、隣立する林に視線を巡らせて、雪絵は気付く。

第四章 太刀の五

腰元に手を添えて木々を縫って走る人影があることに。

それも複数。目につけばその数が多いことも分かり、数えだすと、十や二十は楽に超えるほどだ。

さらに感覚を鋭敏にすると、ざざざと足音が風に乗って伝わる。カチャカチャという音が自分たちの他にも重なっている。

「先陣、気を張れッ！」

突然、雪絵が先程皆を驚かせた以上の、この少女にしてこれほど大声を張り上げられるのか、と目を見開くほどの叫び声を張り出した。

それと同時だった。

視察団の前面を歩く、護衛団の先陣、その脇の林から唐突に影がせり出した。

「ぐあッ!」

「うわあ!」 「ひいッ!」

同時だった。

瞬時に影と共に夏の陽光に閃いた刃が、護衛の武侠の一人を斬り裂いた。

その動きと、倒れる武侠と、舞い散る鮮血——それらに対してすぐ後ろにいた視察団の出資者たちが悲鳴をあげたのだ。

即座に、それに続いて林から男たちが白刃を手に掲げ躍り出てくる。

雪絵は持国とともに前面に駆けだした。室泉は後衛の武侠たちを促し、視察団の要人たちに貼り付き、刀に手を添えた。

間を置かず、視察団と護衛の武侠を取り囲むように、もう一団の人間が数十人、ぞろぞろ羽虫が大量に湧くようにどこからともなく現れた。

「何者か、貴様ら！ 我らを獅士堂一家とその兄弟が護る御仁と知っての狼藉か!」

持国が雪絵の前に手を出して制し、声をあげる。

雪絵は刀の鯉口を切って、その鋭い瞳で奇襲した一団を見遣った。

(ざっと……四十から五十、か。皆エモノを手になっているが……遣える者は…
…三割いるかどうか、といった顔つきね)

そして、戦闘の割り当てを素早く勘定する。

第四章 太刀の五

(こちらが十八で、向こうが十五と雑兵……。そして、こちらは守りつつの戦い。少々厳しくなりそうね)

向こうも数を恃みにしたのが、うまく働いたということか。

(しかし……イイ数ね。相手にとって不足はない)

腕が鳴る、とばかりに口許を凶悪に歪める雪絵。

「我らは刀郷の有志である。不必要な西方の施設建設によって起こる、一方的な利潤の追求に反対の意志を持ち、その抗議として西方に与する輩を斬り捨てる！」

もはや述べられた台詞の内容からも、敵方と認識できる一人が大音声をあげると、その朋輩が気合いと共に刀を振り上げて斬りかかってくる。

「説諭余地なしか！ 応じて斬り伏せろ!!」

それに素早く刀を抜いて、誰よりも疾く動き、一閃で応じ、斬り伏せた雪絵が号令をあげた。

「応!!」 「呀々!!」

一斉に獅士堂側の武俠が刀を抜いた。それに対して、視察団の男たちは顔を青くして互いを視て、周囲の大半が唸り声をあげて刃物を手に走り回るような争乱に、目と口を開けて身を竦ませた。

視察団の要人たちを中心に、向日葵の花弁のようにぐるりと円陣で取り囲み、彼らを護りながら、獅士堂側も応戦する。

持国が隊員と組んで挟撃で敵を確実に斬っていく。

「は！ 軽いなあッ どこの組の回し者か知らないが、ウチの傘下に手を出すにはお粗末なんじゃないかい!!」

他の青刃の二隊の武俠も、即興で班を組み、独りで闘わずに、背中を護り合って刀を振るう。

こうした相手方の数が圧倒的に多い場合、相手に囲まれがちになるので、無暗に一对一の太刀合いにこだわらないのが定石だ。まずは自陣の守りを固めつつ応戦し、地道に、少しずつ、じりじりとでも敵の数を確実に減らしていくことが肝要だ。ここでのポイントといえば、敵がいくら多いといってもそれは、

第四章 太刀の五

その全てを各員が受け持つのではない、ということ。当たり前なことだが、味方のいる集団戦とは、協力戦であり、チームプレイで勝ればよいのである、ということだ。

そして、戦い慣れている武俠たちは、雑兵が乱戦する戦国の合戦のような戦場は、あまり作らない。特にこの刀郷では、組同士の抗争のような複数勢と複数勢の立ち回りであったとしても、陣形を基本とする組織戦を以って闘う場合が多い。一対一の刀技で腕が立つばかりがこの郷の武俠として強く、生き残る術ではないのだ。

(白峰さんあたりは、そういうことをよりしっかりしていそうだけれどね、私は斬り込み役の方があっている)

そう思う雪絵は、誰とも組まずに、単独で突出して刀を振るっていた。

そしてその周囲には、僅かの間の交戦でこの長い黒髪には雑魚では相手にならないと踏んで、敵の中の腕利きがじりと迫る。その挙動を静かに、仲間の皆と、護衛対象と敵とに気と目とを配り、雪絵は下段脇構えで応じる。

襲いかかる複数の白刃に、即応の後手太刀が、果然と閃く。

敵の武俠を華麗に返り討ちにしていく。

その振るわれた刀が血に赤く染まり、機敏に次の動きに移る斬尖を視て、雪絵は小さく頷く。

(うん……いいね。確実に、疾く、鋭くなっている)

この数か月に渡っての超重の振り棒での鍛錬は、雪絵の身体能力を格段に底上げしたようだ。鍛錬棒よりも断然軽い真鍮斬刀を振るってみて、以前よりも歴然とそれを軽々扱える自分を感じた。

それは、若干軽すぎるくらいに鋼の刃物が空を裂き、敵を斬り伏せていった。「おっと……、調子にのらない。慢心はいけない。斬ることに夢中になって、尊意を逸するな、私……」

敵が血相を変えて群がり、ある者は「若い女だてらに、できるな」、 「羽織なら隊長格だ、囲め」と叫ぶ。それを涼しげな顔で受けて、雪絵は静かに構える。

第四章 太刀の五

（心を静かに。彼らとて、主義主張が違えど、刀を振るう理由——想いを抱いている。だから、それに全力で応えて、躊躇いなく斬れ）

（たとえ彼らが武俠の信義に悖ることをしようとしていたとしても、その弱さを許せないところと同じくらい、彼らの気位を汲み、刀を振るおう——）

四方に気を配り、闘う雪絵に、他の獅士堂側の武俠たちも、各々の闘いをしながら、互いの動きに気を割いている。雪絵が引きつけた分の敵に出来る隙を、彼らが巧みに突いて斬り伏せていく。

「さすがお嬢の働きで。こっちや楽が出来るぜ」

「ああ。うまく向こうの頭数を減らしていけば、勝機もある」

武俠たちが刀を振るい、視察団の男たちを庇いながら口許に笑みを浮かべる。電波塔建設に反対を唱える敵方の勢力も、僅かずつにはあるが数を減らされていくのを黙ってみている訳にはいかない。

チンピラをかき集めたのもあるのだろう、刀を手にしても生粋の武俠ほどの力量がない男たちもいる。その敵方の男が叫んだ。

「敵の陣に風穴を開けろ！ 七、八人で突っ込め!!」

「おお!!」

武俠の一人が先陣を切って、刀を構え走ると、それに六人、七人と男たちが続く。先頭の武俠が的確に獅士堂の陣の薄い部分に突貫をかけていく。

「まずい!!」

持国が横目で見て、刀を振り切りながら叫ぶ。

陣を突き破れば、護衛の対象である西方の要人——堅気が斬られるだろう。

雪絵の脳裏に、寺崎や室泉との会話がよみがえる。

自陣の益のためならば、武俠として悖ることも人は時として平気で行おうとしてしまうものなのか、と。それに憤りを感じる。この感情は、雪絵の心が思う、人の弱さに対してのモノだったのか。それとも、護るべき堅気を傷つけられることが許せないところだったのか。

なんにせよ、敵が迫る箇所の武俠たちとしては、守りながら、応戦しながらの片手間で済む数の奔流ではなかった。雪絵も敵の囲いを振り切り、加勢に走

第四章 太刀の五

ろうとした。だが、眼前に足並みを揃える手練れとおぼしき五人が、雪絵をその場に釘付けにする。

「させないさ！」

その場に斬り込んだのは、室泉だった。傍らに組んでいた仲間の武俠を伴って、突撃してくる一陣を挟み込むように迎え撃った。誰もが手隙ではない争乱の中で、そして、数にもものをいわせて押し迫る敵に、室泉たちが轟然と刀を振るって割り行った。

「紫恩！」

「————！」

持国が叫び、雪絵がその声に気を張り詰める。

「やらせはせんッ！」

頭数だけ斬尖を向けて、火薬が炸裂し火花を散らすように突っ込んでくる敵方に、室泉たちに続いて更に武俠たちが二人加わり応戦する。刃がギンギンと金きり音を高鳴らせ、その数に応じて鮮血が舞う。

「ぐうッ！」

「くそッ、一人やられた！」

七人の突貫に対して、四人で場を凌いでいるのが仇となり、室泉の隣で味方が一人斬られた。室泉たちも実力に冴えのない敵を素早く斬り返していく。

互いに数を減らし、敵方の突撃してきた集まりは、一旦さがっていく。

だがその間に、獅士堂の手隙になった囲いの一人が斬られた。

護衛してくれる味方の武俠が、初動の一人に加え、一人、また一人と倒されていくことに、堅気である要人たちは血の気の引いていく思いで奥歯をガタガタいわせていた。

しかし、その被害に応じてというべきか、戦況が時々刻々と変化した結果というべきか、襲い来た敵の数も一一立って武器を構えている者は目に見えて減少していた。

第四章 太刀の五

「お嬢、敵も減りました。ここは！」

「ええ。皆、さがりつついくわよ」

号令に応じて、幾分薄まった敵の囲いを突破して、獅士堂側の一団は麻布方面へ退き始めた。

「外交官殿もお早く」

室泉が足を止めている寺崎を促す。寺崎の脇に居る副官と秘書は、その通りだと寺崎を急かした。しかし、彼は、

「いえ。皆は先にいかせてください。私は坂本さんが戦っておられるのに、我が身大事に先に行く訳には参りません」

と室泉に落ち着いた声で言った。

そんな、と秘書が苦悶の表情をし、副官が滝のような汗をながして先に行く視察団の皆の背を見遣る。

「よろしいのですか」

室泉の問いに、寺崎は頷く。

「殿の隊に迷惑をかけるかもしれませんが、どうか、見届けずに自分だけ下がることをさせないでください。この郷で立ち回るとは、そうした不実に抗うことだと考えております」

寺崎の真摯な眼差しに、「そんな、早く逃げましょう」とは傍らの二人も言えず、ハラハラとした顔で周囲の太刀回りを視る。

「.....わかりました」

ほんの僅かの間の後、室泉が仕方なくと言った声音で首を縦に振った。

「お嬢！ おまかせしても宜しいでしょうか!？」

「ええ。まあ、まかせておきなさいな！」

雪絵はすぐ近くで太刀合っている味方の武侠二人に目配せして、

「私たちが殿を務める。おいきなさい！」

と叫ぶ。それに応じて、寺崎の他二人が室泉に連れられ走り出した。

「やれやれね。堅気は護るモノ。といっても、背負って戦うのがこんなに大変

とは思わなかったわ」

「……はっ……はあつ、……ご、ご迷惑、おかけします……っ ふうっ」

走りながら息を切らし、寺崎は応じる。

赤羽橋を渡り切って、武俠一人に支えられ、寺崎は後ろを振り返る。

そこでは、雪絵が雲を裂く陽光に反射する白刃を振るい、後方から走りくる襲撃者を迎え撃っていた。それほど幅のない橋上では、無論一対一の状況が出来上がる。その状況で遅れをとる雪絵ではない。彼女に斬り伏せられた敵の武俠が、ぐらりと身を傾け、橋の上から川へと落下し、派手に音と水飛沫をあげた。

そうして、さがりつつも敵の数を減らし、しかし、赤羽橋を渡り切った雪絵は、周囲の土手沿いから別れて追って来たのだろう、他の敵の一団が走り寄って来るのを視る。

「面倒ね……本当に」

それに熱いし、と吐き捨てながら、雪絵はブーツで土を蹴り駆ける。寺崎の近くまで来て、「ほら」と彼にまた走ることを促す。

「ひい……っ ひい……っ ……ふうっ」

寺崎が息を切らして走るのが、余程辛そうだったので、雪絵は対照的に呼吸の乱れ一つない顔で嘆息する。

「文官ってやつは、運動不足なんじゃないの。走るのが辛いなら、止まろうか？」

「とっ……とまるわけには、いかない……でしょうっ」

「まあ、命が惜しいならね」

無様に走る様に、少しだけ溜飲がさがる思いで、皮肉を含めた気遣いをする雪絵だったが、少し考える。

「……私もね、退きつつあなたを護るのも面倒だわ。だから、少し方策がある」

ざっと、足を止め、それに応じて寺崎も重い足を止める。肩を激しく上下させて、顔中に汗をかいて膝に手をついた。

つまらなさそうに息をつき、雪絵は言う。

「今、虎ノ門を外務官邸に向かって登っているけれど、往時の道すがら視たで

第四章 太刀の五

しょう。町家がそれなりに連なっているわ。あなたはその影に隠れて待っていてくれればいい。その間に、私たちが残りの敵を片づける」

「そ……、それは、町民に迷惑をかけることに、なりかねませんか……？」

「そうかもしれないし、案外先程の歩くあなたを視ていて、気を使ってくれるかもしれないし、どうかしらね……。ただ、迷っている暇はないわ。どちらでもいいから、早く決めて」

はあはあと息をしながら、寺崎は唾をしんどそうに呑む。喉が渴いて胃から込みあげてくる感じに耐えかね、がはぁッ と息を吐き出した。そして、こくこくと頷く。

「贅沢を言えないということですか。しかし、それだとしても、私をそのまま置き去りにしたりしないでくださいね？」

顔を真っ赤にして汗をかきながら笑って言う、寺崎のその顔が妙に可愛らしく視えて、雪絵はぷっと吹き出す。

「あー、それもいいかもね。善処します」

「いやはや、雪絵さんも春花さん同様、ご冗談の内容が怖いですな」

ピクリと、春花の名が出たことに眉尻をあげる雪絵。少しイライラしてきた。この男の口から春花の名が出ることが、こんなに気障りなモノか、と奥歯を一度強く噛む。

「で、どうするの？ まだ走りたい？」

荒れた地面を革靴で走ってきたことで、実は足の方もキワドイことになっている寺崎は、その点でも無理があまり利かない。そのことは口に出さず、しかし僅かに黙りこんでしまう。今は、この少女を信頼するほかはないか、と寺崎は雪絵の視線の反らされた瞳を視る。

「お嬢!!」

後ろの――麻布方向の二人の武俠が、迫りくる数人の襲撃者の群れに、声をあげる。

「わ、わかりました。では、その案でお願いします」

「わかったわ」

振り向き、「一旦散るわよ」と仲間に声をあげると、寺崎を促して手近な小路に入る雪絵たち。先程の人の気配が多い通りよりも幾分細い、荷車がやっと交差できるほどの小路を少し行って、大通りを一本隔てた町家の並ぶ通りに入る。こうした地域の任務では、事前に現場周辺の地理は予習している。

その通りを洋服の中年と共に走る、レース地の夏羽織の少女を視て、町民がぎょっとして目を剥く。その手に血塗れの刀を手にしていたからだ。しかし、堅気の衆は彼女の羽織に小さくあしらわれる代紋を視て、ひとかどの武俠であると知り、背を向け足早に距離をとっていった。

それに構わず、雪絵は視線を巡らせる。ほどなく、手頃な土蔵を持った商家らしい家屋を目に留める。それを寺崎に腕を振ることで差し示した。

その前でようやく足を止め、よれよれになり、滝のように汗をながし、ぜえぜえふうふうと息を切らせる寺崎。商家の軒先に打ち水をしていた小坊主に、雪絵が話をした。

「獅土堂一家よ。故あって、しばらくこの御仁を隠させてもらう。このことを誰にも口にはいけない。よろしいな」

血で赤く染まった刀を手を提げて言う雪絵は、だが多少の太刀回りの疾走という運動でも涼し気だ。そんな彼女が声も低く言うものだから、小坊主は却ってその威圧感に肝が縮んだ。相手が綺麗な黒髪の少女であったにも拘わらず、顔を青くして四度、五度と首がもげそうなほど激しく頷いた。

話をついた、と雪絵は寺崎を手招きし、商家の敷地に這入り、庭を挟んで曲がったところにある土蔵の、更に影に彼を立たせた。

「奥まった場所だし、大丈夫かな……。蔵の中はさすがに熱いでしょうし」

つぶやく雪絵に対して、寺崎はハンカチで顔を拭いながら息を整えて言う。「……はい。取り敢えず、ここで身を隠しておりますので、坂本さんはお早く仲間の武俠の加勢に戻ってください。私のことは、一旦お気になさらずに」

気にするな、というその言葉に、口許が引き攣るように動いたが、しかし、寺崎の言うとおりに、仲間たちに被害が出ては、寝覚めも悪い。

「そうね。では、そのように」

第四章 太刀の五

視線をながすように横から切り、雪絵は身をひるがえす。

煩わしく感じる男から距離をとり、刀の柄を握る手を改める。太刀合いの渦中に身と気を入れるべく、息を整えた。

獅士堂側の武俠二人は、数で圧倒されながらも五分に届く戦いをしていた。敵は先行して外務官邸に戻って行った本隊に向けて、人員を分けて追跡しているのだろう。しかし、殿を務める雪絵を含む隊が引きつけた人数からしても当初から二十人に満たず、この敵の割り当てならば、向こうもそれほど心配はいらないと彼らは踏んでいた。後は、この状況を自分たちが切り抜けられれば言うことは無い。

彼らがここまで善戦している理由は、敵側の面子が任侠者やその手下のチンピラとみられる刃筋の拙い男たちだったからだ。とはいえ、五倍以上の数と長時間の太刀合いをしていれば、さすがに疲弊する。しかも、時間帯は正午近くで、夏の盛りの暑さが彼らを更に苦しめた。

肌は熱く汗ばみ、呑み込む唾が余計に喉を干上がらせる。

だが、そんな彼らの表情が一転して明るいモノに変わった。

「待たせた。安心して」

虎ノ門近辺で交戦していた武俠たちのもとに、雪絵が走り来て、敵に斬り込んだのだ。

武俠二人は、短く言う雪絵の声に、まだまだ自分たちはやれたんだぜ、というような氣勢に溢れた声で応じる。

「よし、お嬢が加われば、敵の残り頭をきちんと等分出来るな。ここからが競り時だ」

「なにを競っているの。というか、元から等分出来るじゃない」

「ハハッ まあ、勝ったも同然の戦いだ。少しは余裕見せさせてくれよって話でさ」

「押し返すわよ！」

「応ッ!!」

応える二人の声を合図に、反撃が始まった。

第四章 太刀の五

目の前の敵の頭数は、まだ雪絵たちの四倍はある。それでも、さほど手練れでもない敵を一人当たり相手する数を考えれば、最初に襲撃があった時点の厳しさは、もはや切り抜けたようなものだ。

後始末のような散敵になるが、しかし、雪絵としては、これで済むわけではないことは理解しているつもりだ。

本隊に向かったであろう残敵の処理や、今回の電波塔建設反対勢力について問い質すために、生き残りを二、三名捕縛する必要もある。

本隊の安否についてや、そちらの要人の被害が出ていないかななどについては、今は持国や室泉などの仲間がうまくやってくれることを信頼するしかない。

そして、この場だ。雪絵は敵を後手返して斬り伏せながら考える。

(私たち殿の隊に要人が一人混じっていた事は敵も知っている。それがいなくなったことで、僅かばかりでも周辺に探索の人員を割いてみたいのが敵の今の心情だろう)

(それをさせないためには、こちらの勢いが強く、敵が人員を他に回せない、と思わせる必要がある。数で劣ろうとも、こちらが優勢で勢いがある太刀回りを見せる必要がある)

そんな護衛隊の隊長としての思慮を巡らせながらも、その眼光は瞳に映る相対する者どもを見据え、刀を振るう意志と気位に煌めく。

若草色の柄紐の刀で、不逞の者共と渡り合う様は、悠然と後の先を構え、鋭く相手を捉えていく。

そんな刃閃風渦巻く最中で、雪絵はふう、と物憂げに吐息をつく。

(まったく。厄介な仕事を任されたものだわ。本当に)

(あの男がいなければ、こんな気煩いしなくて済むかしらね、本当に)

(ああ。どうにかして、いなくなってくれないかな、本当に)

眼前で舞う鮮血と、陽光に光を反射する白刃を瞳に映し、戦いの血に慣れた頭は、静かに考えた。

(ああ……、それならいっそ――)

第四章 太刀の五

電波塔の建設に反対するという、現時点で出所の分からない勢力。彼ら襲撃者たちの一団が現れたのは、赤羽橋を渡ったあたりで、そこから東麻布の大通りを虎ノ門方面にのぼっている。おそらく、現存の主戦場といえる太刀合いの主要舞台は、ここらあたりの麻布から虎ノ門に入った通りのどこかだろう。

雪絵が立ち去り、蟬の鳴き声と町下の話声などの生活音くらしが聞こえない土蔵の影で、寺崎はじりじりと心を焦がす。

(雪絵さんは大丈夫だろうか.....)

いや、あの坂本春花が見出した少女が、そう易々とやられるとは思えない。それは春花から聞かされる少女武俠の話からも想像できる。

(雪絵さんも腕が立つ。しかし、彼女の安否から離れて考えると、多数入り乱れての争乱となれば、獅士堂側に被害は避けられないのだろう)

今回の件で、先程の刃傷立ち回りだけでも、自分の目の前で三人の名前を知る武俠が斬られた。それが、自分たち西方の人間を護衛してくれる獅士堂側の、少なく見積もっても確定している被害だ。

そして、今回の視察――否、電波塔関連で出た被害はそれだけではない。

こちらに襲撃を掛けてきた、大体の把握でも四、五十人はいる武俠などの郷の人間のほとんどが、死者や負傷者となることが免れない。寺崎が刀郷に入ってから、これまでで目にして来た中でも、一番大きな規模での刃傷立ち回りが繰り広げられたのだ。

(まだ、始まりも始まりの段階でも、これだけの刃傷沙汰になろうとは)

そうは思っても、春花は笑っているだろうと想像できる。それがこの郷の常であり、倣いだ、と。

しかし、それで人死にが正当化されるのは、この郷の内でのことであり、この郷の人達――それが郷の人間のすべからずではないとは思いますが――だから出来る心の持ちようだと寺崎は思うのだ。

寺崎は、自分が外交官として刀郷に入り活動するうえで、自身の身を白刃が裂き、傷つき果てるかもしれないことは、とうの昔に了解している。しかし、それに連なって自分の行動の余波として傷つく人たちに対して、何も思わない

感性の持ち主でもなかった。

(しかし、少しでも双方に被害が出ずに済ませられたらというのは、甘い考えかもしれない)

人が争い、利益を確保すべく動くうえで、双方無傷で被害がなく、平穩に済ませられる。それが出来れば、なによりそれに勝るものはない。寺崎は交渉の会話と取り引きをして、場や事態を収める職業の人間であるから、尚更そう思う。

外交とは、双方の緊張が強まり過ぎると、ふとした切っ掛けで戦争に発展することまで含んで、自陣の望むことを実現しようとする。先の大戦以降、国際政治上でのその勢いこそ下火になりはしているが、それは互いに望み、欲しているモノや処が異なる故に生じる齟齬ではあるし、人と人が集まるというだけでも、否が応にも生じるモノだ、歴史でなくても社会と人々が語っている。

だから、互いが何の損失もなく事態を收拾させることが出来るというのは、対峙する者たちにとって、果てしなき理想だ。

(そして、この郷の中で、西方の人間が我を通すことは、戦後から今現在に至るも波風を立たせずにはいられなのだ)

だからこそ、地道に 『波風立たない方向』 に人の心の舵をとっていく必要があるのだと、寺崎はある人物から聞かされていた。

(この電波塔が建てられることで、西方は、あちらの人間を、日本東西間の協定的に、施設の維持、管理のためにある程度この郷に駐屯させられる)

それが続くことで、この郷の民衆の心にも、異分子に対するある程度の許容というものが水面の波紋のように広がり、効果をもたらすかもしれない。

今回の電波塔.....そして、久しく現れなかった刀郷と交われる外交官の存在は、そうした意図をもつ西方の人間たちの作る 『綾』 だった。

(私は、それを止める力はないし、ある一面でこれは両者のためだ。しかし、私を推してくれた夾帝は、小さな変化で揺らぐ程度の郷ならば、大過ない、と口にしていた)

しかし、蟬の音が耳につく、と寺崎は土蔵と塀で切り取られた空を仰ぎ見る。

第四章 太刀の五

一瞬、ネクタイを緩めようか迷い、まだ工作中だと自分を戒める。

(小さな変化の為とはいえ、人が傷つき、死んでいる。その彼らの気持ちを重んじないことが、政治には時として必要悪として付き纏うのは.....割り切るれことだろうか)

そう思い、キョロキョロと奥まった日陰の場所で首を回す。

「ああ.....本当に、雪絵さんたちは大丈夫だろうか」

寺崎は、ぽつりつつぶやいた。

.....続く。